

—2021 年度 卒業式より—

魂譲り（譲り手）

今日、私たちは活水女子大学での学びを終え、それぞれに与えられた新たな道を歩もうとしています。これまでの学生生活を振り返ると、様々な出会いや経験で多くのことを学びました。そこには喜びや楽しさだけでなく、思い悩むことや苦しいこともありました。そんなときも家族や友人、先生方、多くの人に支えられ、今日という日を迎えることができました。

活水学院は今から 143 年前、愛と奉仕を建学の精神として掲げ、「この学院に連なる全ての者が、いつまでも渴くことのない活ける水を豊かに汲み取り、永遠の命を得るように」との祈りを込め、エリザベス・ラッセル先生が創立されました。この手桶には、その思いが満ち溢れており、ここに結ばれてきたリボンの一本一本には、先輩方の祈りが込められ、活水の伝統として今もなお受け継がれております。

今回私は、卒業生を代表して、「白」と「黄色」のリボンを新たに結び加え、在学生の皆様にお譲り致します。白のリボンには、「染まらない純粋な心を持ち続けてほしい」との願いを、「黄色」のリボンには「周りに幸せや光を与える者となってほしい」との願いを込め、お譲り致します。

在学生の皆様、どうかこの 2 本のリボンに込められた思いを心に留め、「活ける水を汲み取るもの」となってください。皆様の歩みの支えとなるよう、「新約聖書マタイによる福音書 5 章 14 節」の御言葉「あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れることができません。」をお贈り致します。

最後に、活水学院の上に、神様の豊かな祝福とお恵みがこれからも限りなくありますよう、心よりお祈り申し上げます。

尾家 愛佳（健康生活学部子ども学科 卒業生）

魂譲り（受け手）

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

ただいま、これまで多くの先輩方より受け継がれてまいりましたこの手桶をお譲り頂きました。

今年は新たに、「染まらない純粋な心を持ち続けてほしい」との願いを「白」のリボンに、「周りに幸せや光を与える者となってほしい」との願いを「黄色」のリボンに託し、結び加えて頂きました。わたくしたち在校生は、この 2 本のリボンに込められた思いを心に刻み、「永遠に渴くことのない、活ける水」をくみ続ける活水の学生として、歩んでまいりたいと思います。

卒業生の皆様は、この学び舎で、神様からの限りない愛と先生方やご家族の祈りに支えられ、共に歩んできた友人たちと、体験や学びを通して大きく成長されたことでしょう。これからは、それぞれの道を歩んでいかれますが、喜びや感謝の時ばかりではなく、忍耐が試されるときや、困難を覚え全てを投げ出したくなるときもきっとあると思います。しかし、どのような時にも、神様はいつも共にいて先輩方の行く手を照らし、導いてくださいます。どうか愛と希望をもってこれからの道を歩み続けてください。

最後に、今日から始まる新たな歩みの上に、神様の豊かなお恵みと祝福がありますよう、心よりお祈り申し上げます。

荒木 乙羽（国際文化学部日本文化学科 3 年）

一朝の礼拝から 1—

「手を放して神に任せる」

マルコによる福音書 12 章 30 節

アルコール依存症と診断されて 20 余年、当初はアルコールの摂取をやめればすべて解決、1 年もすれば薔薇色の未来が拓けると思っておりました。しかし、色々な自助グループに通っているうちに、アルコールを断つのは実はスタート地点でしかないと気付かされました。

様々な自助グループで使っている 12 ステッププログラムというものがあります。これは AA (Alcoholic Anonymous) というアルコール依存症者たちの実践のステップとして使われて初め、今やそれ以外の様々な問題 (薬物・ギャンブル・摂食・恋愛・ゲーム・共依存・被虐待のトラウマを抱えた人たち) を抱える人達のために使われています。その 12 ステップを実践していくためには、まず自分の無力を認めることから始めなければなりません。そして、回復の過程でアルコールに対して無力なだけではなく、すべてのものに対して無力であるということを認めることが必要となってきます。自分の無力を認めてしまったら、なにを頼りに生きればいいのか。そこで神の出番が待っています。そして、さらに自分の意思だけではどうしようもない状況に追い込まれていることを認め、降伏して神に任せることが要求されるのです。

多分、一般社会では自分の努力 (意思・考え) で、人より秀でた人になることが称賛され、それは自分が必死に努力した結果だとされているのではないのでしょうか。しかし、そのために、本来、受け取れるはずの神の賜物を沢山見過ごしているような気がしてなりません。必死になってしがみついているものが何かを自分で気づき、手を放してみることはないかと思います。手を放すというのは諦めるということではありません。自分がしがみついているものを手から放して成り行きに任せるということだと思っています。そうすると必要なものはまた自分の元に戻ってくるし、不必要なものは離れていきます。

それまでの生き方、「こうでなければならない」「こういうことはやってはいけない」という自分ルールから自由になり、神の意思に任せることが生き易さへと繋がっていくと信じております、

マタイ 6 章 34 節、「明日のことを思い煩うな。明日のことは、明日自身が思い煩うであらう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。」

安川 徹 (音楽学科)

一朝の礼拝から 2—

「裁くことの愚かさ」

ルカによる福音書 6 章 37～38 節

神様は、他人を自分のきめつけで判断するなということを私たちに伝えていきます。

国際文化学部の富永先生と話す機会があり、留学生のことを知る機会がありました。対留学生というと、どうしても日本人と距離を感じてしまいがちです。事務室に訪れる留学生たちは、日本語の運用能力も様々です。

先生との話は次のようなものでした。私たちが留学生と接する際、日本人と違うという線を引いてしまうものですが、結局は同じ人間です。出身地が違うだけの活水生として接してくださいと言われたのです。その言葉を聞いて、私が今まで「留学生だから日本語がわからないのは当然で、ある程度配慮してあげなければならない。文化も違うのだから、日本のことが理解できないだろう。」と思っていたことは、自分自身のものさしで勝手に判断していたことだということに気づいたのです。先生と話しをした後、聖書の「人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。」という言葉思い出したのです。

留学生というラベルをつけていますが、年齢的には大学生であり、物事の判断は自分でできるので、ただ使う言葉が違っているだけなのです。

自分で勝手に留学生は〇〇だからという観点で判断していたことの愚かさに改めて気づかされました。人と人とのやりとりということを忘れ、日本人と留学生という視点になってしまっていたのです。

普段のやり取りの中で、あの人に話しても無駄だから、あの人は理解してくれない等、自分勝手に判断してしまうことは多くあります。相手が理解していないのか、それとも理解できない理由があるのかという視点を持つことが必要なのかもしれません。本学は、そもそも創立者がラッセル先生という外国人宣教師であり、国際的・多文化的な学校であるはずで。

人を自分のものさしだけで判断せず、相手を受け入れる心を持つように。人は自分だけで生きているのではないのです。人が他の誰かと支えあって生きてくことが、神様の望むことなのです。

中野忠彦 (教務課)

—朝の礼拝から 1—

「神様のご計画」

創世記 11 章 1～9 節

皆さんは、世界に言語がいくつくらいあるかご存知でしょうか。研究者によって数え方は異なりますが、6,900 くらいと言われています。ところで、今日お読みしたのは、有名な「バベルの塔」の物語です。この物語は、「人類が塔をつくって、神様に挑戦しようとしたので、神様は塔を崩した」という解釈が一般的です。そして、この解釈から派生して、「バベルの塔」は、「傲慢に対する戒め」や「実現不可能な計画」の意味でも用いられることがあります。

しかし、神様にはもっと大きなご計画があるように思います。たしかに、互いの言葉が通じなくなったことで、意思の疎通が難しくなり、誤解や軋轢が生まれることもあったかもしれません。一方で、意思の疎通が容易でない状況では、互いの気持ちを考えたり言いたいことを推測したりと、互いが配慮するようになったのではないのでしょうか。また、異なる言語を話す人々の間では、互いの言葉が混合し、新たな言葉が生まれることもあったでしょう。さらに、近年では、AI 技術などを使った自動翻訳など、意思疎通を図るツールも開発されています。このように、私たちがコミュニケーションのために新しいことに挑戦したり、考える機会を与えられたとも考えられます。

このようなことから、神様が言葉を混乱させ、互いの言葉を聞き分けられないようにされた背景には、私たちが思い至らない大きなご計画があったように思うのです。

一見すると試練と感ずることも、神様が与えてくださった何らかの機会であり、ご計画であると思います。そのようなご計画のうちにあって、日々神様の御心に適った行いをしていきたいと思います。

富永 祐子（日本文化学科）

—朝の礼拝から 2—

「神様の都合で生きる」

コリントの信徒への手紙 I 6 章 19～20 節

先日、携帯電話会社大手の KDDI は、大規模の通信障害を起こしました。この通信障害の被害に遭われた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

この現象をみて、「サバイバルファミリー」という映画を思い出しました。この映画は、2017 年に公開された映画です。ある日突然、日本全国の電力供給が止まり、ガスや水道などのライフラインが全て停止してしまいます。携帯電話やパソコンはもちろん、時計までも使用不可能となり、あらゆる情報網が遮断され、人々は自給自足の生活を強いられます。東京都内に住むある家族は、数日で生活に困窮し、「西日本に行けば電力網が生きている」という噂を頼りに、親戚のある鹿児島へ向かう決意をします。しかし、飛行機や新幹線などの交通機関が動いているわけもなく、高速道路を自転車で、鹿児島へ向けて移動します。自転車移動での生活も本州の終わりに近づいた頃、家族は、蒸気機関車の音を聞きます。その音を頼りに駅を探し出し、水と石炭さえあれば動く蒸気機関車に乗り込み、鹿児島を目指します。蒸気機関車には、大勢の人が乗車していました。その映像は、人間が際限なく便利さを追求していき、アナログの強みと恩恵を忘れた、今の社会に問いを投げかけられているようでした。

わたしたちも、自分の都合の良さや便利さを求めて行動してしまうことがないのでしょうか。私自身、学生の成長のために働いているはずですが、しかし、こちらがやった方が早い。手間がかからない。など、何が学生の成長に繋がるかを忘れて行動してしまうことがあります。この行動が、学生の将来にどう影響するのかを考えて行動しなければと反省しています。

本日与えられました聖書箇所は、イエス・キリストの弟子パウロが書いた、人間の感情の赴くままに行動するコリント教会の信徒への戒めの手紙です。「人間の都合から生まれた行動は、神の栄光を現すことができない」と教えてくれているのではないのでしょうか。学ぶとき、働くとき、大切な決断をするときに心を静め、人間の都合に支配されることなく、神様が示す行動を選び取りたいと思います。

大曲 喜美子（宗教センター）

一朝の礼拝から 1—

眠れない夜には

詩編 4 編 1～9 節

みなさんは、夜、よく眠れますか。なかなか寝つけない人や眠りが浅い人は多いようで、薬局やスーパーで、快眠グッズやサプリメント、チョコレートや乳酸飲料などを見かけます。売れすぎて、販売が一時中止になったというニュースもありました。

私も寝つきがあまり良いほうではありません。これまでも眠るために、色々な方法を試してみました。「羊を数える」というのもその一つです。しかし、効果は感じられませんでした。調べてみたところ、一説によると日本語で数えるのには意味がないそうです。「sheep」の発音が呼吸に近いことが羊を数えるとよいといわれる理由のようです。

子どもの頃は眠れていたのに、大人になるとなぜうまく眠ることができないのか、考えてみました。寝る前に、短いお祈りをするのが、子どもの頃から変わらない私の習慣です。子どもの頃のお祈りは、神様にその日の出来事を報告し、無事に1日を過ごせたことに対する感謝のお祈りでした。一方、大人になってからは、これらに加え、「でも…」と、やり残したことや心残りのこと、困ったことなどを吐露しているように思います。こうして思い返してみると、子どもの頃と同じく、お祈りしているようで、ただ一日の反省を話していたと気づきました。

聖書には、「主の慈しみに生きる人を主は見分けてよび求める声を聞いてくださると知れ、おののいて罪を離れよ。横たわる時も自らの心とかたり、そして沈黙に入れ、ふさわしい捧げ物を捧げて、主に依り頼め」とあります。神様はいつでも私たちが求めれば答えてくださり、寄り添ってくださいます。みなさんも眠れない夜には、神様に語りかけてみませんか。

富永 祐子（日本文化学科）

一朝の礼拝から 2—

信仰について

ヘブライ人への手紙 11 章 1 節

時の流れは早いもので、あっという間に12月になり、クリスマスが近づいてきています。私にとってクリスマスは、数あるキリスト教の行事の中で最も重要だというイメージがあり、楽しい思い出が多くあります。今日はイエス様の誕生を祝うクリスマスを迎える前に、今一度信仰について考えを深めていこうと思います。

私にとって、現時点で信仰とは「神様を信じ、聖書の教えを守り、日々感謝を忘れず過ごすこと」です。実際信仰というものに対する解釈は人それぞれで、正答はないのだらうと思います。しかし、時折「私は今、本当に信仰をもって過ごしているのだろうか」と不安に思ってしまうことがあります。そこで、聖書で信仰はどのように定義されているのかを調べてみました。

まず聖書に書いてある「望んでいる事がら」とは、自分が望んでいることではなく、神ご自身、あるいはキリストご自身のこと、そして神によってもたらされる天における報いことを意味しているそうです。また、「信仰は天において受ける大きな報いを保証するもの」と記述されていました。ここでの報いとは、天国に行けるということです。また「目に見えない事実を確認すること」とありますが、見えない事実とは「将来に起こることを確かなものとしてつかむ手」であり、私たちはやがてこの地上での生活を終えた後、天国へ行くことができると確信しています。したがって、「信仰」とは、自分が願っているものを何回も自分に言い聞かせて、それがかなえられるようにと神に押し付けることではなく、神が言われたこと、また神が願っておられることを、そのまま自分の心に受け入れて、なんの疑いもせず、そのとおりにすると確信することなのです。

私たちは自分の知恵や力ではどうしようもないということが多々あります。それでもなおこの地上の何かを頼りにしていたのでは、生きる根底が揺らいでしまっている以上、どうしようもありません。しかし、信仰を持っていれば、どんなことが起こっても揺らぐことはないのです。今回信仰について調べ、学ぶことが出来たことを活かしつつ、また新たな気持ちでクリスマスを迎えようと思います。

今田 涼加（音楽学科 2 年）

一朝の礼拝から 1

「キリスト山に登る」

列王記上 20 章 22～23 節

日本では初日の出を拝みに山に登ることがあります。小さい頃は山での遭難のニュースを見て、なぜきつい思いをして危険な登山をするのか不思議でした。長じて日本史の研究者となり、日本の修験道では、断崖絶壁を登り、種々宗教体験をする事を知りました。天台宗には回峰行がある事も知りました。またラジオで著名な登山家が、吹雪の山中をひたすら歩いていると、故郷の実家の幻が本当に目の前に現れると話していました。聖書には山に登る話がよく出て来ます。イスラエル人は最初、山地にいたので、その神は、平地のカナン人からは「山の神」と呼ばれました。前宗教主任の二瓶先生が話された、夜のシナイ山に登った時の様子―暗くて険しい山道を登り、夜が明けた時の神々しい山の風景―も聴きました。キリストもよく山に入って祈っています。

日本で有名な吉野山は、桜の名所で、修験の山でもあり、672 年の壬申の乱では、ここに隠棲していた大海人皇子（後の天武天皇）が、東国に脱出して挙兵しています。後世、後醍醐天皇もここに逃げ込み、南朝は 50 年以上も室町幕府に抵抗しました。

著名な史跡なので 9 年前に私も行ってみました。吉野山でバスに乗ると雪が強くなり、山頂に着くと吹雪となって、樹木の黒い枝は白く覆われ、お堂の手水が凍っていました。下りのバスが来るまで周りを見ていると、雪が止んで少し明るくなり、下の人里が見えました。百人一首に「朝ぼらけ 有明の月とみるまでに 吉野の里に降れる白雪」という歌があります。天から下界を見下ろすような感覚がしました。宇宙飛行士が、宇宙から地球を見て帰ると、宗教的人間になるという話があります。キリストが山から見下ろした時、同じ気持ちがあったのだろうかとも想像しました。吉野山に登って、少しキリストに近づいたような気がします。

細井 浩志（日本文化学科）